

名和会長のシリーズインタビュー<<この人にきく>>⑥

京都橘大学現代ビジネス学部環境デザイン学科教授 小暮 宣雄先生

「アーツを通して創るまち、ひと、大学」

小暮先生と初めてお会いしたのは、龍谷大学の理事長会議であった。手ぬぐいを粹にかぶる様子もさることながら、お話の内容も個性的で、このような先生もいるのだと印象に残った。京都橘大学の生協は、地域との関係を重視し、地域の野菜を食材にしたり、清水焼を使ったりとユニークな活動を展開してきた。今回も学生の学習をサポートする読書推進の制度を工夫された。これは急いで小暮先生にインタビューしなければ、ということので今回のお話になった次第である、やはり先生はユニークなお方でした。

お話し 小暮宣雄先生（Kと略）

聞き手 名和又介先生（京都事業連合理事長、京滋・奈良ブロック会長、Nと略）

音楽と文学と社会学と

N 日頃、京都橘学園生協理事長としてご指導いただき、ありがとうございます。先生には読書カフェでもお世話になり、お話を聴く機会を楽しみにしておりました。まず先生の生い立ちからお聞かせください。

K 大阪市福島の野田で生まれました。安治川北側の下町。都心だけれど、高齢化やインナーシティ問題も抱えている。震災もあったでしょうけど、古い長屋が残っているような街ですね。

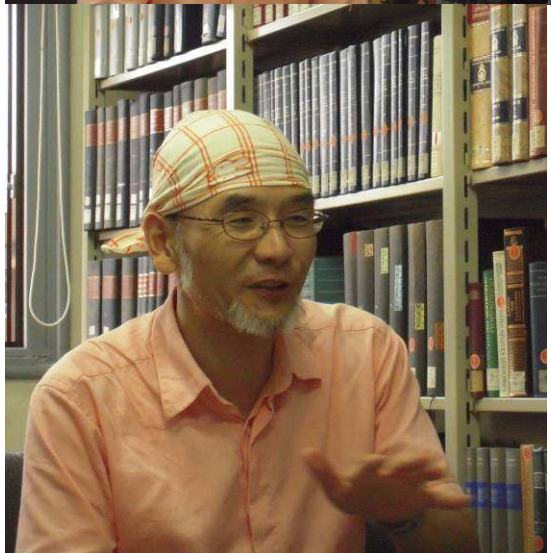
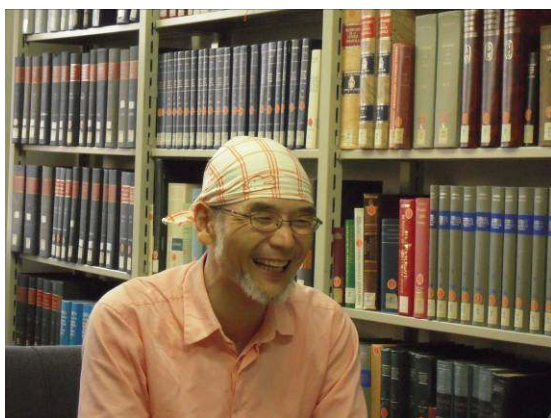
N ご両親は？

K 親父は住友系の会社に勤めていました。音楽好きで、住友の吹奏楽団でクラリネットを吹いていました。コーラス団にも入って、ラジオに出演したとか。会社員でしたが、出世よりも音楽活動の方が好きだったようです。僕や妹にピアノを習わせて、親父が一番喜んでいました。お袋は根っからの文学少女でした。

N そういうご両親のもとで、灘高校へ行かれた訳ですね。

K 中学から灘校へ通いました。灘では、先輩に後に作家になる高橋源一郎さん（4年上）や故中島らもさん（3年上）がいて、文芸部とか生徒会で鳴らしていた。高校生のくせに、午前中だけ授業に出て、午後は映画館に入り浸っている、というような武勇伝が残っています。僕なんかは、夏休みの補講に行ったふりをして、甲子園で野球を観てた、という程度でした。はじめ柔道部に入りましたが、頭を打って怖くなって、文芸部へ。文芸部時代は詩を作っていて、戯曲を書いた友人の文士劇に出たり、現代音楽のライブ・コンサート

を企画するなど、文学作品を読むだけじゃなくて芸術全般に関心がありました。



N そういふ文学好きで東大法学部へ入学された。どこかでズレたのですか。

K 選んだのは文Ⅰです。文Ⅱ、文Ⅲは目的のある人が行くけど、文Ⅰはぼくのように目的のない人間もいた(笑)。1年生の時に事故で指を怪我して半年ほど入院する羽目になり、ちょっと出遅れたような感じの大学生活。文学部へ転部しようとするとう法学概論などの他に取らないといけない単位が多くて、結

局2年で文学部にはいけないと諦めました。3年生になって、本郷へ行き出して、法律がベースとはいえ、政治の歴史や法哲学、法社会学に関心が向いて、とりわけ社会学が面白くなった。社会学と現象学の接点とか、ドラマツルギー論を勉強しました。文化人類学や民俗学にも興味があり、「演技空間として政治」や、政治学の中には、当時「演技と実技」というようなテーマの授業があったんですね。

N 法の枠内にとどまらない世界に広がったんですね。

K 公務員試験や司法試験には一向役立たない分野に興味がありました。

“地域づくり”の公務員からアーツマネジメントへ

N 公務員上級試験に合格されましたね。

K 僕は体制順応タイプ。たまたまその頃、大平首相(当時)が、戦前の内務省地方局の有志たちが提唱していた「田園都市国家構想」を取り上げていた。もともとイギリスの田園都市の思想を日本に根付かせようというようなソフトな分野の政策を考えていることを知って、国家公務員として面白い仕事ができそうな気がして、第1志望を自治省にしました。

第2志望は厚生省。大学時代、障害者のボランティアをしていたので……

N それはどういうボランティアですか。

K 小学生の頃、近所に知的障碍児がいて、その子と仲が良かったことや、大学に入ってから盲学校の教師を養成する教育大付属から録音ボランティアを頼まれたことがあり、ボランティア・センターに登録しました。母親が男勝りに民生委員として福祉活動をしてきたことも素地にあったのかもしれませんが。公務員になったのも母親の影響かも。

N 何年、お役所勤めを？

K 23年間いました。入ってすぐに宮崎県へ。通称見習いさんという地方課、地域政策課に2年間。その後、国土庁の全国総合整備計画の基本的研究を2年間。ここが私にとっての大学院でした。サービス経済化や地域産業おこしの研究会を開いて、報告書を書き、本を作る。慶応の井原先生はじめいろんな先生方に添削してもらい、とても勉強させてもらいました。「地域アイデンティティ」という新しい言葉の使いはじめもこの研究会だった。企業誘致ではなく、その地方の内発的な地域振興（活性化）を考えていました。いわゆるまちおこし（産業おこしという命名もした）・まちづくりという概念の草創期の基礎的資料づくりをしたと思います。

N 日本はお役所が基本的なプランをつくるんですね。

K 地方財政計画では大蔵省と喧嘩もしましたし、27歳で徳島市役所の財政部長に就き、560億ぐらいの予算作りをしました。そのうち1億円を地域の人たちと一緒に有効に使うと、ものすごいことができるという、勉強になりました。徳島の木材を使って、地元の建築士などと一緒に、ゼネコンに従属しない形で、駅前にベンチを作ったりして憩える空間づくりを手掛けました。

N 徳島のお城周辺はとてもいいですね。

K その後、沖縄開発庁課長補佐として、首里城公園の復元などに携わりました。昭和61年頃です。その後は福岡県教育庁財務課長。県内の「ふるさと創生」企画で、アート・イベントをしたり、天神エリアで現代アートのフェスティバルをはじめました。

N 福岡がアジア色を出したイベントや建物を建て始めた頃は、注目されましたね。

K 平成になって、自治省に戻り、「ふるさと創生」担当の企画室では、出てくる企画の半分以上は“文化”に関わるものになっていきました。「ふるさと創生」の1億円の交付金が誘発したのは、いわゆる文化ホールでした。

N 僕は役人というのは、アメリカやヨーロッパへ行って先進事例を真似してというのが当たり前と思っているのですが。

K 何がやりたかったかということ、多目的ホールは無目的だ、ということ。箱モノ行政批判でした。専用ホールをつくれということ、誰もがクラシック音楽専用のホールを建てようとした。しかし、芸術は音楽だけではないし、もっといろんなことをしている人たちの芸術の場としての複合的な施設が必要だと思い、意識して演劇を見ようと、90年代初頭、アングラ演劇や小劇場演劇などを中心に年間200本ぐらい見ました。しばらくして、そのうち80ほどをダンスにして、80年代にヨーロッパで勃興したコンテンポラリー・ダンスも

見ていました。文楽や能楽、雅楽、ガムラン音楽やインド舞踊など、アジア芸能も。

どうして公共施設で演劇を取り上げてこなかったかという、そもそも新劇時代まで反体制的だったし、アングラという非体制だった。ようやく 90 年代になって平田オリザさんが「対話と演劇」を提唱したり、地域演劇が出て来て、言葉が一つじゃないように演劇もひとつじゃない、地域ごとの演劇とタイアップしていけるようになりました。ホールの中の芸術専用施設ではあるが、多様な芸術でもあることを勉強してもらおうと。二度目に国土庁の課長になったときには、半島振興室長&地方振興局の特命担当として比較的自由に予算が使えたので、ステージ・ラボ（ラボラトリー）の研究をしました。

N 演劇を通じて地方の文化をどう掘り起こすか、ということですね。幅広いネットワークや人脈もできそうですね。そういうおもしろい立場にいて、どうしてお役人から方向転換されたのですか。

K 端的に言ってやりすぎた。要するに自治省の文化部門の天下り先をつくれという流れに反抗したからです。財団法人「地域創造」という財団をつくった。僕はそこで専門家を集めたかったが、受け入れられず喧嘩して、飛ばされました。

N それで大学の教師に？

K 滋賀県にある国の研修所の参与兼教授として、なかば“幽閑”身分でした。5時15分になると大阪や京都へ行って演劇を見て、こっそり文化関係の仕事を手掛けるようになりました。

N 日本全国を見ていて、まず美術館をつくり、博物館、そして次の段階で文化ホールが出来てきました。

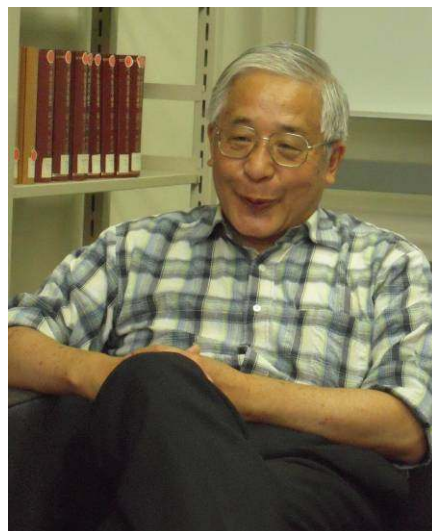
K 80年代終わりから90年代にかけて、ホールが乱立し、その中に今に生きるようなインスティテュートとしての施設、システムが生まれた。水戸美術館が有名です。収蔵をしない現代アートセンターが誕生しました。国の方でも芸術文化振興基金や企業メセナ協議会が生まれました。そのころ、文化政策学部をつくりたいという大学があつて、静岡県文化芸術大学と京都橘女子大。僕が書いた本が引用されたり、担当の入試課長さんからカリキュラムについての相談を受けていました。アーツマネジメントの先生がいないんですよ、といわれ、じゃ僕が、となりました。45歳のときです。

N それまでのネットワークを活かされた訳ですね。最初はどのような授業をされたのですか。

K はじめ立命館大学の非常勤で、アーツマネジメント論を担当し、コンソーシアム京都ではアーツ&セラピーという講座のコーディネーターをさせていただきました。橘では、大学をステージにみたてて、朗読をしたり……

N 先日、お聞きした授業の様子では、とてもおもしろい取組みをされていますね。

K 演劇公演を見に行くだけでなく、事前に戯曲を読み合



い、勉強と並行していくという授業です。泉鏡花の『多神教』という戯曲を取り上げました。しかも、その舞台が、五條會館という元花街の歌舞練場。あるいは、現在進行形の舞台づくりにも接して、さらに舞台を見てどう感じるか、創られているか、その裏を探ります。

N ユニークな授業ですね。

大学生協らしい取り組みを

N 橘学園生協の理事長をお引き受けいただき、何年になりますか。

K 5年になります。文化政策学部、現在の都市環境デザイン学科は住んでいる街をどうするか、ということも研究テーマだったので、山科の街にある大学としての視点を大事にしていました。生協としても食育、食文化に着目しました。専務理事の大塚さんや職員の東川さんら、意識の高い職員さんが大学とも好い関係を築いてくれました。清水焼団地が近くにあり、清水焼きの陶器を使ってカフェをしたり、100円朝食やスタッフのお母さんが作ったお漬物を提供するなど、いろんなチャレンジが出来ました。

N 大学からの支援もあったのですか。

K 水光費は取らない代わりに学生向けに使ってくれという支援をいただきました。ミールカードの導入でどうなるかという課題もありますが。

N 読書応援もされています。

K 300万円ぐらいの予算を使い、半年間で2万円分、こういう研究をしたいとか、本を読むというレポートを出してもらい補助しようというものです。150人の学生を対象にしています。ひとつは読書を習慣づけたいという願い。もうひとつは、逆に言うと学生がどういう本を選ぶか、その傾向や分析もできるかなと思っています。

N 大学生協のいいところ、悪いところなどお気づきのことがあれば。

K 大学ごとの違いはありますね。大学生協の統一感というか、生協らしさのサービスはまだまだ出来そうな気がします。フェアトレードなどをイギリスみたいにカジュアルにできればいいなあと思います。

N もっとメリハリのあることをしようというアドバイスですね。

どうも長時間ありがとうございました。今後ともよろしくお願いします。

(インタビュー 2010年10月7日)

